

## 【「物部川 21 世紀の森と水の会」講演会・勉強会

豪雨時代の森林管理－山が崩れる、川が埋もれる、水が危ない－】

日時：令和 7 年 2 月 21 日（金）午後 2 時～午後 4 時

場所：香美市立中央公民館 2 階会議室

主催：物部川 21 世紀の森と水の会

後援：物部川清流保全推進協議会、物部川流域ふるさと交流推進協議会

令和 7 年 2 月 21 日（金）に物部川 21 世紀の森と水の会主催で講演会・勉強会が開催され、林業関係者や地元住民など、約 130 名が参加しました。物部川 21 世紀の森と水の会は、物部川流域の豊かな水と森づくりのために活動しており、物部川の生き物とふれあう活動や流域を考えるための調査・研究活動など、流域を巻き込んだ形での事業を展開しています。今回は、東京大学大学院の蔵治光一郎教授から、球磨川流域等の調査を踏まえた実態と豪雨時代の真の「流域治水」のための森林管理・施業のあり方等について講演がありました。

球磨川流域の実態についてのお話では、2020 年に発生した球磨川流域での豪雨災害について、12 時間で 400mm 前後の豪雨に襲われたことにより、皆伐地の林道、集材路、林地が崩れ、下部の民家被災等、大きな被害を受けたとの説明がありました。豪雨災害後、地元住民からは、流域の 80% を占める山・森林が、間伐の遅れ、溪岸の浸食、皆伐（車両系高性能機械集材）の増加、シカ食害などを原因として、荒れていること、大雨時に川に流れてくる洪水、土砂、流木は、山から流れ出てくることから、治水の議論は山のことも一緒に議論すべきなどの意見が寄せられたそうです。

近年の豪雨災害では、重機で付けられた集材路の盛土部分が崩壊することが多く、できるだけ集材路を減らし、架線系集材（タワーヤーダー）への転換が望ましいこと、皆伐後再造林を行った若い人工林は崩れやすい傾向があること、また、増えすぎたシカにより下草が食べ尽くされ、裸地化が進んでいることも被害拡大に繋がっていることなどの説明がありました。

森林は所有者に所有権があり、森林をどうするのが正解かという問いに対して、模範解答は存在しないが、その中で、適切に森林を管理していくには、FSC 等の森林認証の普及による森林への意識の高まりや、所有者と行政、住民の連携を深めてパートナーシップ組織を設立（球磨川では今年発足）していく必要があるとのコメントがありました。

戦後の拡大造林木が伐期にさしかかる中、今後の適正な森林管理について考える機会となりました。

